

## 「地域が元気であるために」

岩手県済生会支部長 伊藤 彬 氏

岩手県済生会支部長の伊藤彬です。今回のシンポジウムに合わせて基調講演をするように命じられました。皆様が活動なさっている内容にうまく合えばいいかなと思いながらこの壇上に立っております。皆様方、各地からようこそ北上市にお越しいただきました。各地で本日のテーマになる内容に沿って、たくさん活動なさっていらっしゃると伺っております。皆様の活動に心から敬意を表したいと存じます。これからも済生会の理念に沿ってたくさんご活動くださるようお願いをいたしたいと存じます。

さて「地域が元気であるために」と題しましてお話をさせていただきたいと思います。

先ほど映像でご覧になっていただいたと思いますが、明治・大正・昭和の初期のころ、このまちは農村型のまちとして歩みを続けておりました。日本各地で地方都市は農村型、あるいは漁村型、山林型というところがほとんどだったと伺っております。この地域もそうでありました。生活を営むためには農業を中心として活動せざるをえないような状況だったと思われまます。

たくさんの農家が元気よく働いておりましたから、この地域には各地からたくさんの農産物が寄せられました。それにご案内のように北上川がまちの端に流れております。当時の物流は川でした。鉄道がなかったころは川でしたから、農家の皆さんはここに農産物を集めて大きな船に積み替えて、ここから宮城県、あるいは都会のほうに出荷をするという状況でした。農業の多いところはお互いに助け合いながら仕事をしていたようです。当時は農業機械も何もありませんでしたから、人手、馬、牛が作業の中心だったようです。

そういうところで、後ほどのソーシャルインクルージョンに通ずると思いますが、「結の心」が生まれているのが農家の一つの大きな財産でした。お互いに助け合いながら農作業をして、収穫をして、出荷をする。一人でできないことは近所の農家、地域の農家、部落の農家がみんな集まって助け合うという結の心ができています。これは日本文化、日本の地域の形成の中で大変大きな力であったと思います。

それがだんだん薄れていくことに、実は昭和末期、平成のころから大変気になることになっていました。後ほどのお話に結び付けていきたいと思います。

実は先ほどの映像でお示しいたしましたが、済生会の前身である黒沢尻病院ができたのは昭和3年です。いまのように農業が中心の地域でしたから、医療に関する施設はほとん

どなかったと思われます。

黒沢尻病院ができた背景ですが、ちょっと自慢話になるかもしれませんが、建てたのは私の曾祖父です。どうして建てたかという、お医者さんがいない、総合病院がない、もし病気になれば盛岡、あるいは仙台まで行かなければ治療を受けることができないという状況だったからです。

私の父は、伊藤家の初めての男の子。上にお姉さんが5人いて、後継ぎがやっとできたということで曾祖父は孫の誕生をすごく喜んでいました。一生懸命勉強して立派な旧制中学に入りましたが、胸を病んでしまいました。曾祖父は大変なことになったと。仙台の病院で治療するわけですが、農業がさかんなこの地域で健康な人が育つはずなのに、育たないのはおかしい。あるいは病気になったときにこの地域で何とかしなければいけないだろう。そこで、みんなの知恵を集めて黒沢尻病院を建てることになりました。

一番の基本は、私の父である孫がかわいくてしょうがなかった。この子が健康でなければいけない、この子が健康になれば地域全体が健康になるだろうと考えたようです。すごいことをやったものだと私は子ども心に思っていました。そんな最中に、今度は私の祖父が町長をやることになり、そのころになって医療の体制も黒沢尻病院も、大変順調に推移していたようです。

そして時代の変化の中で、個人が持っていた大きな病院の経営を、どこかにお任せするという時代になってきたようです。たぶんうちの祖父はどこに寄付したらいいのかと考えたときに、いくつかの移転先があったと思いますが、明治45年につくられた済生会病院の理念・理想に感動、あるいは同じような気持ちがあつて、ここだったらつないでもらえるのかなという思いの中で済生会にバトンタッチをすることになったようです。

当時の病院としては総合病院ですから、まちの中心として一生懸命地域の皆さんと病院運営にあたっていたようですが、昭和11年に済生会病院にシフトされました。そのころから産婦人科もいろいろ仕事をなさっていたようですが、3年後の昭和14年、私はここで取り上げてもらうことになりました。伊藤家の孫が誕生できそう、しかも男らしいということであつて、大変みんなで頑張つて私を取り上げてくれたようです。

その後、疫癘をやつたり、消化不良をやつたり、扁桃腺炎を患つたり、数回見捨てられましたが、何とか済生会で助けられて、来月83歳を迎えることになりました。これも地域医療の成果だと思つて、心から感謝をしながら、この気持ちを地域のみならず一生懸命つないでいこうという心境です。

そんな中で、地域もいろいろ変わっていきます。農業型のまちは、出生率が高いまちでしたから、たくさんのお子さんがある家庭がいっぱいありました。私の親父のきょうだいは10人です。当時はみんな大家族でした。それがどんどん変わってくるのですが、農家を中心の地域は、農業を継ぐのが1人、あとは勉強して仕事に就く。金の卵と言われた時代が結構長くありました。ここから都会にみんな出て行って職を得るという時代でしたから、出生率が減ってくると、当然人口減につながってくるという予想がされますし、農業から新しいかたちの地域づくりをしていった場合、そこに働く人をどうやって残していこうか、どうやって教育していこうかと考える時代に突入していきます。そんな中で産業構造もどんどん変化していきます。人材を育てるための学校教育の充実、訓練をする場所、そして働く場所の設置に流れは変わっていきます。

レジュメの中に、北上市の工業都市への変遷と地方の変化と書きましたが、時代の流れはそういうふうに変わっていきます。大都市でも、あるいは皆さんが働いている地域でもそんな時代を経ていまの時代につながってきているのだらうと思います。そこに住まいをしていた方は、どういうふうに自分たちがまちづくりを変えていこうかと一生懸命お考えになったと思います。

いまは変わりましたが、当時はまちづくりの変化を考えるのは、まずは地域の経済人、お役人が中心であったかもしれません。いまはどんどん変わってきており、住民が中心になってものを考えていく時代にならなければ、その地域は衰退するだらうと言われていきます。そういう人たちが健全で働くための施設をいろいろつくっていく、それを応援する人、行政といろいろな事業者とが一体になってくるまちづくりが求められている時代になってきました。

私たちは、先ほど申し上げたようにこの場で教育を受けて、大都市に人材を派遣する金の卵の時代から、ここに働く場をたくさんつくってあげなければいけないという時代が変わって、企業の誘致をすることによってたくさん働く場所をつくって、繁盛してもらうことを応援するまちづくりにつながっています。

皆さんがお住まいになっている地域もそういう地域がたくさんあるだらうと思います。人材を輩出する地域から人材を滞留させて地域のために稼いでもらう人を増やしていくことは、地方のまちにとっては非常に重要なことになってきました。そういう時代に変わってきています。そういう中でどうしていったらいいのかということが大きな課題になっています。

「結の心」の醸成は、農業がさかんな時代は自ずと形成されて、それが地域が生きていく上でのお互いの精神の持ち合いでつながっていたと言われていますが、少し薄れる時代になってきたと思い始めたときがありました。企業誘致が進んで、いろいろなところからたくさんの人がこの地域に住まうようになります。いつの時代か忘れましたが、大都会では「秋深き隣は何をする人ぞ」、隣近所の付き合いが薄れてくるのが見えてきた時代があったようです。

結の心ができ始めたころは、皆さんもご経験なさっているかもしれませんが隣近所との付き合いが大変いいお付き合い、そして仲良く一つの目標に向かっていく、地方によっては働く場の楽しみをつくり上げるために、農の地は特に民俗芸能が発展していきます。お互いに地域に伝わる、この地域であれば鬼剣舞だったり、隣のまちでは獅子踊りだったり、沿岸に行けば獅子舞だったり、あるいは御神楽だったり、いろいろな芸能でお互いに仕事を癒しながら、仕事を楽しく続ける、そんなお付き合いの民俗芸能の団体ができて仲良く暮らしていく。そんなことが薄れていく時代になってくれば、地域のまちづくりに大きな変化が出てくる。これはこれからの社会にとっては大変心配なことになるのではないだろうかというのが、私たちが子育てを進め始めたころに考えられたことでした。

私も学生時代、サラリーマン時代と 18 年間都会で暮らしました。そのときは自分の住んでいる地域のまちづくり・地域づくりにまったく携わることはありませんでした。興味もあまりありませんでした。勤めている会社でどうやって一生懸命働いて、いい地位を得ていくかということがサラリーマンの基本でした。しかし 36 歳で U ターンしてふるさとに帰ってきますと、ふるさとの地域の活動は都会の活動とまったく違ったものでした。

地域でみんな元気よく、仲良く、楽しく暮らしていくために、何をしていたらいいだろうかということが、青年らしいテーマの中でたくさん協議されました。そこでの活動一つひとつ参加することになっていきます。一緒に活動するのは、商店の主であったり、農家の主であったり、病院の経営者であったり、いろいろな職種の人でした。そこではいろいろな話し合いをし、いろいろなことをみんなで研究しながら、自分が住むまちをどうやっていいまちにしていこうかという協議がなされていきます。そんな中でいろいろ考えられたのが、やはり住民と行政とのタイアップをどうしていこうかということでした。

昔は、全部お役所に任せて、お役所のやるとおりにやっているのがいいのだ、それでいいのだという風潮がありました。でもそれでいいのだろうか。住民がいろいろなことを考え、いろいろな知恵を出して提案をしながら、それを行政の方針の中に少しでも取り入れ

てもらおうなかたちになっていったら、もっといいのではないだろうかという議論が、青年会議所活動の中などでずいぶん出てまいりました。

そんな中で気づいたことがずいぶんありました。まず小中学校の学校教育の中で、不登校、いじめなどいろいろなこと、私たちが子どもたちにはあっても表面化しなかった、あるいは大事な問題として取り上げられなかった問題が最近になってずいぶん増えてきたという感じがあります。

何でだろう。家庭内でできるもの、家庭内でできないものは地域でできるもの。地域でできないものは行政やもっと大きいところで手伝ってもらおう。そういう中で解決するのが普通のルールですが、そういうルールが学校と地域と行政との関係プレーが欠如することによって、うまくいっていない、これをどうしていったらいいのだろうか。簡単に言えば知縁・地縁が薄れてきている。知縁・地縁が薄れてくるということは、やっぱり地域の活力が減少することになるのではないだろうか。これは何とかしなければいけない時代はすぐ来るのではないだろうか、というのが大きなテーマになっていました。

実は、北上市には16の地域に分割された公民館がありました。昭和29年に地域の市町村が合併して北上市が誕生しました。平成3年にさらに1町1村1市で合併して新北上市ができました。エリアが広がっていくと同時に、それぞれ管轄する部分が広がりますから、区民、住民の動きに大きな変化が出てくるかもしれない。そういう中で、市から公民館単位の職員を派遣して指導する体制を取ってきた時代が十数年ありました。住民は派遣された優秀な職員にみんな頼り切ってしまうと、自分たちで活動する力が徐々に薄れてきます。このことは地域が元気になる活力を自分たちから放棄することになりはしないか、という心配をするようになりました。

1999年、私は市長に就任しましたが、そんな若いときからの思いから、数年かけて知縁・地縁の復活につなげていきたい、地域の自分たちが自力で地域づくり、まちづくりをしていただきたいと思いました。市から派遣されている職員を全部引き揚げました。すごく怒られました。ある程度予算をつけて、それで地域に合う人を採用しなさいと、地域の事務方の責任者を自分たちが選んで、自分たちが採用するようにしました。

自分たちの活動計画は自分たちで考えなさい。それが地域計画の始まりです。市長は行政がやるべき仕事を地域にぶん投げたと言われました。人がつくった計画で動いて本物になるはずがない。地域を一番知っている人が計画を立てなさい、それを実行する責任を持ちなさい。それが地域の発展につながる。議論しました。大反発を食らいました。

しかし若い市役所の職員は、これからの時代はそうならなければ知縁・地縁は復活しない、いまで言うソーシャルインクルージョンにつながっていかないと、だから市長やりましょう、先輩がノーと言っても私たちが頑張りますと言って、ものすごく頑張ってくれました。そして1年かけて、それぞれの地域が地域計画を立てるようにしました。10年計画を立てて、5年ごとに見直しをしながら地域づくりをするようになりました。

自分たちがつくった計画ですから、自分たちがやる責任がある。やらなければいけない。使命感がきっちり増えていきます。それによってお互いの知縁・地縁が復活すると助け合いの精神が出始めます。そして工業が進んでいる北上市ですから、いろいろなところからいろいろな方が転居してきます。なじみにくい時期もあります。しかしそういう人を温かく迎え入れ、温かく交流することによって、地域の衰退は防げます。

そしてまた悪いことに個人情報保護法令が出て、民生・児童委員の方が高齢者の名簿を持ってお互いに声を掛け合いながら融通し合って、助け合って、情報共有する場があったはずなのに、非常にやりにくくなりました。ますます知縁・地縁が薄れていく。こういうときに住民自らが、民生委員だけでなく全員が、そういう仕事を理解して、情報を共有して持ち合うことによって助け合いの精神が出るというかたちになるはずだ。そういうまちづくりが進んできました。

最初反対した連中が、自分たちでやりだしてよかったね、と言うようになりました。自分たちの意見を強く行政に反映するようになりました。もちろん病院経営、医院の経営についてもたくさんの意見が出てくるようです。先生方とも地域の医療関係の皆さんとの交流もあるようです。北上市の場合は、特に医師会の皆さんと地域の病院、行政の連携が大変重要視されています。しょっちゅう交流をなさっておられるようです。これもまた地域のまちづくりの中では大きな要素ではないか。健康で生きていくための一つの土台になってくるのではないかという思いです。

そんな中から、実はずっと若いときに教わった言葉があります。精神病理学者のユンクの「人間の幸せの五つの条件」ですが、若いときから先輩たちに叩き込まれてきました。どこにおいてもこの五つの条件を整備することによって、きちっとした家庭ができたり、職場ができたり、あるいは部活の精神が保たれたりすると教わってきました。

順不同ですが、ユンクが言っている言葉の中に、まず健康であること。これは言わなくてもわかると思いますが、市長になったとき、行政としてこの健康であることを維持するためにどうでしょうか。まずは医の関係をきっちりと整備すること、そしてたとえばワクチ

ンの問題でも緩和ケアの問題でも、いろいろな問題を行政と医がきちんと連携することによって、スムーズな市民へのPRと活動に結びつくだろう。

健康であることの条件を満足させることはいっぱいある。まず医が一つ、それから老人施設の問題があったり、さまざまな課題がある。スポーツの問題もあります。スポーツをやることによって健康になる。そのためにはスポーツの施設、スポーツ選手の指導体制、運動公園の整備など、いくつかの課題が出てきます。まだまだあると思います。もちろん学習においての健康づくり、健康教育も大きな要件の一つです。たとえばコロナの問題であっても、それを皆さんにきちんと伝達をして、どうしていったらコロナが予防できるか、みんなでそれをどういうふうに活動に結び付けていくかということもやらなければいけない一つの仕事です。

健康であることと一言で片づけますが、私たちが済生会としてやらなければいけないことは、これをベースにしていろいろなものが出てくる。日常活動の中でお医者さんを中心にしながら職員みんなで考えながら、自分たちが住んでいる地域の健康づくりのためのポイントを一つひとつ考え、一つひとつ実行に移して、一つひとつ問題解決をしていくという活動を常にやっていかなければいけないという思いがあるかと思います。

二つに「美しいものを知る能力」。皆さんはどんな発想になるでしょうか。一つには環境を整備しよう。その地域が公害にさらされない、いい環境であったら、健康であるための一つの条件が整うかもしれません。北上市は川があって山があって、美しい環境に恵まれています。そういう環境をきちんと整備する努力をみんなでやっていかなければいけないということが「美しいものを知る能力」、それを育てていく一つの条件でもあります。

いい環境、いい風景のところには育つ子は、情感豊かな子に育つだろうと私は思います。そういう子が大きくなったときに、皆さんのお役に立てるか、皆さんと仲良くやっていけるか、そういうことが子育てをするお父さん、お母さんにとっても大きなポイントであって、美しいものを知る能力は、技術、文化にもつながっていきますが、環境を整備することもそういうことなんだという思いを知っていただきたいと思います。

「朝起きたときにやる仕事があること」。高齢者になると朝起きて、今日何をしようかな、夕方になって何にもしなかったけれど1日が早く暮れてしまったなど、そういう中で生きがいは求められるでしょうか。朝起きたときに、今日はゲートボールをやろう、ゴルフに行こう、あるいは隣近所のおばちゃんと踊りの練習をしよう、俳句の勉強をしよう、高齢者はそういうことでもいいかもしれません。

私たちのような高齢者と違って皆さんのような人たちは、やっぱり自分の働く場がきちんと確保できている、家族を養うことができる、職に就いていることができる、そういうことで朝起きたときにやる仕事がかっちりある。でも幸せの条件は、そういう恵まれた環境でかっちり働くことが一つ大事ですが、朝のんびんだらりと学校に行ったり、会社に行ったりするのではなくて、厳しく言えば、前の晩に寝るときに、よし、明日はこれとこれが私の任務、これとこれをやろう、早く寝よう。朝起きたときに、よし、今日はこれをやるんだと張り切ってやるときに人間らしい生きがいが出てきて、人間の成長につながると言われているようです。

そんな意味で、ぜひ皆さん方、これからのシンポジウムでいろいろなご議論、研究をなさると思いますが、自分たちが朝起きたときに、今日は何をしようか、何で皆さんのお役に立ってやろうか、夕方よかったなと思うような毎日を過ごせるような朝の時間帯ができたらいいなと思います。

「人間関係がうまくいくこと」。これはまったくそうです。どんな職場でも難しい人もいます。いやな人もいます。それが職場なのです。でも若いときに言われました。うんと怒るやつで、いやだなと思うやつが10年経ったあとに、実はいい人だったな、あの人に怒られてよかったなと思う時代が、あなたは必ず来るはずだと。そういうときにきっちり仕事を覚えておくとよく言われました。確かにいました。けんかもしましたが、いま考えてみるとそのときわからなくても、ああ、あいつはああいうことを言ってくれたんだなと思うことがあったら、幸せの条件の一つにはまるかなとも思います。

そんな意味で、人間関係がうまくいくためにはどうしたらいいか。自分も優しくならなければいけない、自分もいやな人間だと思われるようにならないほうがいいと言われますが、言うべきことはきっちり言う、そのためにきっちり勉強するというのを、人間関係をうまくいくための条件の一つに入れている人もいるようです。

職場、特に病院の職場は難しいかもしれません。いろいろな現象の人がいっぱい来ますし、みんな一通りで扱うことはできないかもしれません。患者とも人間関係の連係プレーの中の一つだろうと思いますが、そこを上手にやるのが私たち病院関係者の任務の一つであると思います。職場でもそのように人間関係をうまくやってください。家庭内でもうまくやってください。町内会でもうまくやってください。その中から全体として幸せが出てくるのだらうと思います。

五つ目に、「ほどよいと思うくらいのお金があること」。これは難しい。人によってほど



よいと思うのはいくらぐらいでしょうか。年金生活になるとだいたいそのくらいで暮らさなければいけないから、そのくらいプラスアルファがあればいい。ただ子育ての最中の人には、やっぱりお金がかかります。子どもが大学に行くための送金をしなければいけないとか、ローンを払わなくてはならないとか、難しいですが、やっぱりきっちりとした収入を得ることは大事なことになります。

そのためには自分の力をきっちりつけなければいけない。勉強もしない、何もしないでいい会社に入れると思ったら大きな間違いで、その間違いを持っている人がずいぶんいる。自分だけ恵まれていないとか、自分だけついていないとか言っていますが、本当についていないという人はそんなにいないもので、大した勉強もしないし活動もしない、努力もしないからそれなりのことになってしまっている人がいますが、そういうふうに教えるのはかなり面倒なことです。

だから皆さんもお仲間と一緒に仕事をする上で、やっぱり一生懸命やったら悪いことはないと思います。ほどよいというお金は非常に難しいのですが、中国に行って若い者と交流していて、あなたにとって一番大事なものは何かと聞くと、日本の若者とずいぶん違います。日本の若者は友だちが一番大事、中国が一番大事なのはお金、その次に家族と言います。育ち方の違いでしょうか。でもやっぱりお金は大事だろうと思います。

働く場をたくさんつくらなければいけない時代に、この北上市も変わってきた。そういう職場をたくさんつくってあげようと思って、企業誘致をものすごく一生懸命やりました。いま北上市はバブルです。朝晩タクシーは捕まりません。アパート・マンションはほとんど空室がありません。今回お見えになった方は、ホテルを取るのに苦労しませんでしたか。いま満室状態です。

企業がどんどん来ています。いま半導体大手のキオクシアの 2 棟目が建っていますが、1 棟目で投資された金が 1 兆円、2 棟目も 1 兆円と言われています。そのくらいの大きな企業が来ます。付随する企業も何十社か必ず来ることになります。雇用は増えます。雇用が増えれば朝起きたときにやる仕事がたくさん出てくる。そしてほどよいと思うお金に近いお金ももらえるようになります。まちづくりの成果はそういうところからいろいろなものに波及してくるのです。そしてまちが大きくなっていきます。

そういう中で何をやらなければいけないかとなると、やはりソーシャルインクルージョンということになってきます。私風に言うと、お互いに助け合いの精神、冒頭に申し上げた「結の心」がきっちりと整ってくることです。

隣組の歌をご存じの方は手を挙げてください。「とんとんとんからりと隣組」という歌を聞いたことがあるでしょう。1番は、「格子を開ければ隣組、届けてください回覧板。知らせられたり知らせたり」。2番目は、「教えられたり教えたり」。3番目は「助け合ったり助けたり」。これはソーシャルインクルージョンのベースだと思いませんか。

さっき知縁・地縁の話をしました。お互いに助け合う心、知らせ合う心、楽しみ合う心、そういうものを隣近所で持ったり、部落で持ったり、まち全体で持てたら、自然とソーシャルインクルージョンが強化されてくることになると思います。これが健康なまちの一つのポイントだと思います。そういうものをさっき理事長さんもお話しになりました。済生会として、ぜひ推進していく。そして皆さんが健康で明るく、楽しく暮らせるようなまちづくりに応援できたら、まちづくりの一環として活動できたら、済生会としての果たす役割が大きなものなのだ。地域の皆さんから強い信頼を得られることなのだということです。

古い時代からお話をしましたが、日本人が持っているよさは、結の心、ソーシャルインクルージョンのベースになるものなのです。それを薄れさせてしまうから難しい時代になってきた場合に、お互いに助け合いができなくなってしまった。これをいま一度思い直して、済生会が中心となって私たちの身の回りから、そういうものを徹底していくことによって、その地域、その地域は強くなれると私は思います。

ずっとお話をしてきたのは、結の心を大事にしたい。お互いに助け合う気持ちを地域で、知縁・地縁を大事にすることによってお互い強くなる。それが限界集落を防ぐことになったり、人口減を防ぐことになったりするのだという議論を職員と地域と一生懸命やりました。結論が出るまではまだ少し時間がかかるかもしれません。そんな中でベースになってくるものを、ユンクの言葉の中からお話をさせていただきました。

こんなことを皆さんが一つひとつ研究なさって、わかりやすい自分の言葉に変えて、いろいろな人と交流をしていくことによって、ソーシャルインクルージョンが横文字を使わなくても自然とPRできたら、大変すばらしい済生会の活動になるのではないかと、こんなところに話を持っていきました。

まだまだお話ししたいことはいっぱいあるのですが、与えられた時間が近づいてまいりました。先輩から教わったことを仲間と議論して、さらにそれをいいものに練り上げて、後輩に教えることによって私たちの組織の中の地縁はつながっていきます。それが組織の強固さになって、それが力を発揮することが自然にソーシャルインクルージョンを実践することになるのではないかと最近思っています。

地域にはいろいろな課題があります。行政と組んでやることは、行政にやってよ、やってよと言うだけではなくて、私たちが考えて、ソーシャルインクルージョンはこういうかたちで私たちがやっている、それを応援してください、助けてください、支援をしてくださいということを、具体的に提案できるような活動をぜひ皆さんで作り上げていくべきだと思っています。

私たちの活動で、一つひとつそういうものを作り上げていくことによって、地域は元気になるだろう。元気にしてあげるために済生会があると思っていいのだろうと思います。そのために果たすべき役割を地域のニーズにどう合わせていくか。地域が最も必要なことから即決してやっていく。医師会の皆さん、行政の皆さんからそういうことを協議した上で進めていくことも大事だろうと思いますが、まず自分たちが持っていることを練り上げて、いろいろなところに提案をしていくのも大事なことだと思っています。

北上済生会では、モバイルクリニック、訪問介護、それぞれ皆さんも方々でおやりになっていることを、地方独自のアイデアと地方独自のやり方の中で練り上げて、いま活動につなげていっているようです。どうぞ各地でご活躍の皆さん、それぞれの地域に合った活動を練り上げて、地域の信頼に応えてあげてください。健康で笑顔あふれるまちづくりの一メンバーとして、皆さんの活動を心からご期待申し上げ、私の話を閉じさせていただきます。ご清聴、ありがとうございました。(拍手)